

鳴教かわら版 No.13

学長特別対談



鳴門教育大学長

やました かず お
山下 一夫

日本格付研究所 社長 (元 ゆうちょ銀行社長)

たかぎ しょうきち
高木 祥吉 氏

高木祥吉氏の話をお聞きしていると、私だけでなく、子供たち、保護者、教員の皆さんにとって、モデル・手本となるが多々あるように思います。

ところで、鳴門教育大学附属学校園は1986(昭和61)年4月に徳島大学から移管され、現在に至っています。

国立大学附属学校園の使命と役割は、教員養成のための「教育実習校」であり、大学の研究を行う「実験校」であり、そしてその成果を地域貢献に役立てる「モデル校」です。

鳴門教育大学附属学校園は、この3点を果たすとともに、何より子供たちが「附属に行きたい、行って良かった」と思えるように、大学と附属学校園が協力し努力を積み重ねてきました。

まだまだ至らぬ点があることを認めた上で、保護者の方々及び子供たちとともに、全国さらには世界の学校のモデル校となるように、より良い附属学校園を築いて行きましょう。

高木 祥吉 氏 略歴

- 1948(昭和23)年5月 徳島市南前川町生まれ
- 徳島大学附属小学校(現 鳴門教育大学附属小学校)
- 徳島大学附属中学校(現 鳴門教育大学附属中学校)
- 徳島県立城南高等学校
- 東京大学法学部 卒業
- 1971(昭和46)年 大蔵省入省
- 1979年 ハーバード大学ロースクール留学
- 1980年 同修了
- 2002(平成14)年 金融庁長官
- 2006年 日本郵政株式会社副社長
- 同年 ゆうちょ銀行社長(2009年退任)
- 2013年 早稲田大学大学院ファイナンス研究科 客員教授
- 現 在 株式会社日本格付研究所社長

本特集は、2019(平成31)年2月7日(木)に、東京の学士会館で行われた高木祥吉氏との学長特別対談を編集したものです。なお、塚本章人 元BS朝日常務取締役、西村公孝 鳴門教育大学副学長(附属学校担当)が同席しました。

山下 お忙しい中、時間をとっていただきまして、ありがとうございます。

本学の附属小学校・中学校、当時は徳島大学附属でしたが、その卒業生であり、金融庁長官、ゆうちょ銀行初代社長など、数多くの要職を勤めてこられました高木祥吉様をお迎えし、お話をうかがいたいと思っております。

まずもって、昨年（2018年）11月、瑞宝重光章受章おめでとうございます。

高木 ありがとうございます。

山下 附属中学校長大泉より、70周年記念誌と、高木さんが附属中学校時代に書かれた『そだち』の作文、揮毫式の高木さんのサインなどを預かってきました。

高木 『そだち』や揮毫式のサイン、懐かしいですね。担任の山西啓二先生、良く覚えています。揮毫式の題字は、河原校長先生です。確か、徳島大学の教授で立派な先生でしたよ。

山下 高木さんは、中学校3年生の時に生徒会長をされていたのですね。『そだち・36号』に「在校生の諸君へ」という題の後輩に宛てた作文が載っています。

高木 そんなのあるんですか。ちょっと恥ずかしいですね。あまり書いた記憶はありませんが。

山下 少し披露させていただきます。「ぼくの中学生生活は夢と希望に満ちあふれ、楽しいものだった。・・・だが、それは、後になってふり返っているからであって、その当時は、本当に苦しいことの連続であった。テストの前日の苦しかったこ

と、また、入学式の時の演説で失敗し、大変恥づかしかったことなど・・・しかし、そのような苦しかったことは、ぼくにとって、とてもプラスになったと思っている。・・・苦しみや悲しみが、自分にだけふりかかってくるように思いがちである。だが、この広い世界には、同じような人がたくさんいるということを忘れないでほしい。」

高木 りっぱなことを書いていますね。（笑）

附属学校時代の思い出

山下 附属学校時代の思い出は。

高木 父親が前川町で材木業を営んでいたのです、附属小中学校の近くに住んでいました。当時は、助任川沿いに材木業者が立ち並んでおり、馬車で材木を運んでいました。ある時その馬が暴走した怖い記憶もあります。また、中学校の周りは田んぼや畑ばかりでしたね。

小中学校では体育が得意で何でもやりました。特にローラースケートは徳島公園の中にあつた市の体育館にリンクがあり良くやりましたね。

水泳も得意でした。確か小学2年生の時に当時徳島では珍しいプールができ、水泳に夢中になりました。高校では水泳部にスカウトされたほどです。

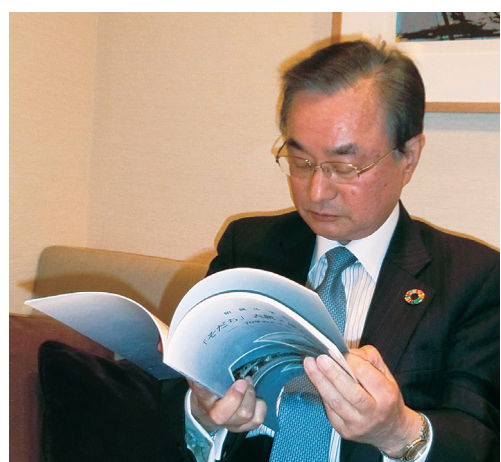
また、野球も好きでチームを作って市の大会に出ようと友だちと相談したこともありました。

山下 すごいですね。文武両道というか、よく学びよく遊べですね。野球はどこを守っていたのですか。

高木 確かピッチャーだったかと思います。勉強



1964（昭和39）年元旦に行われた揮毫式の雄名録



「そだち」を手取る高木氏

揮毫式（きごうしき）
 新年を迎え、心ひきしめる新しい出発にあたって、校長の「新年のことば」の揮毫を囲み、全校生徒と全教職員が1枚の条幅（雄名録）に毛筆で自分の名前を書くという、緊張と厳肅さの中で母校に対する思いを育む附属中学校の伝統の行事です。
 1951（昭和26）年より一度の中断も無く、毎年揮毫してきた掛け軸が体育館の壁面にずらりと並ぶ様は壮観です。

では、算数・数学が好きで得意でしたね。高校は城南高校に進学したのですが、時間があれば数学の問題を解いていました。

山下 そんなに数学が得意なら数学を活かした職業は考えられなかったのですか。

高木 母親の弟に高校の数学の先生がいたので、それも考えましたが、父親に法学部を勧められたこともあって、法学部に進学しました。どのような分野でも、数学的な思考能力は必要だと思いますね。

山下 附属中学校の『そだち・28号』に高木さんのお母様が、「入学に際し子供に一番望む事は克己心と忍耐力でございます。」と書いておられますね。ご両親はどのような方でしたか。

高木 母親の言葉はあまり覚えていませんが、常々そのようなことは言われていたように記憶しています。

それよりも両親にはマイナス思考がなく、常に褒めてくれましたね。例えば算数で70点取ってきても、普通の親なら、後30点頑張ればとか、できなかったところを指摘することが多いと思いますが、両親はできたところを「こんな難しい問題が解けるなんてすごいね」と褒めてくれました。けっして、マイナスの評価はしませんでしたね。そのため私は難しい問題に自信を持って、楽しみながら取り組むことができました。

山下 それは良い話ですね。人間の成長には、褒めて認めて、自信を持たせることが重要です。高木さんのご両親は、親の教育力、親力がおありだったんですね。

どうして附属小中学校を選ばれたのでしょうか。

高木 今もそうだと思いますが、当時附属小中学校が教育機関として高く評価されていたということではないでしょうか。それと家が附属に近かったこともあったと思います。

山下 附属小中学校で学んでいる後輩にメッセージがありましたら、お話いただけませんかでしょうか。

高木 「夢」を持ってほしいという事ですね。夢があれば夢に向かって努力します。コツコツ努力すれば夢に近づくことができます。

もちろん、夢は夢なので、その実現はそんなに簡単なことではありませんが、夢を持って努力していけば夢が近づいてきます。

ぜひ、後輩の小中学生のみなさんには、大きな「夢」を持って実現できるように努力することの大切さを伝えたいですね。

山下 素晴らしいことですね。

教師及び教師を志す学生に向けて

山下 本学は、将来教員になる学生や現職の教員が大学院で学んでいますので、学生や現職教員にも何かメッセージがあれば、お願いできますでしょうか。

高木 後輩のみなさんへのメッセージと同じですが、子どもに「夢」と「自信」を持たせられる教育者になって欲しいと思いますね。

そのためには、まず、子どもに夢を持たせるようにしていただきたいと思います。そのうえで、子どもができたことを褒めてあげて、努力の成果を認めてあげる。そして、子どもに自信を持たせる。子どもは努力して1つずつできるようになれば自信がつき、さらに大きな夢に向かって努力することになると思います。

組織の運営でも同じことが言えると思います。組織のメンバーを褒めて自信を持たせて育てなければ組織としての力が発揮できないと思います。そのためには、相当な忍耐力も必要になりますね。

山下 そうですね。今、日本の教育界では、世界の国々と比較して自信のない、自尊心の低い子どもの教育をどうするかが課題になっています。まず、自信を持たせられる教育者としての姿勢が重要となりますね。

最後に、私からお願いがあります。本日のお話しを、西村副学長と私だけがお聞きしたのではもったいない。是非、徳島に帰省される機会に、時間があれば附属小中学生や保護者の皆さんに、お話をさせていただければ幸いです。

高木 そのような機会があればお話しさせていただきたいと思います。

山下 よろしくお願いいたします。本日は改めましてお礼申し上げますとともに、今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



高木氏（左）と山下学長

附属幼稚園

1893年4月 附属小に幼稚科設置
1908(明治41)年4月設置

カレーライス作り

6月、5歳児たちがカレーライスを作って全学級の園児たちや教職員に振る舞ってくれます。ジャガイモやタマネギなどの野菜は4歳児組の時に自分たちで植え、育ててきたものです。今、注目されている非認知的能力という「目標達成の情熱」をもって、仲間と協力し、粘り強く最後まで、やり遂げ、皆に喜んでもらう達成感を味わいます。

加えて、野菜を大切に育てたり、無駄に作りすぎたり捨てたりしない、エコな環境マインドの育成もはかります。食べ終わったカレー皿は古新聞紙で拭いた後に洗うことも忘れません。循環する水や生命を感じ「地球人」としての意識が高まります。



附属小学校

1875(明治8)年12月設置

送別音楽会

毎年2月に5年生が中心となり、これまでお世話になった6年生に感謝の気持ちを伝える会として、送別音楽会・校内オリエンテーリング・送別たこあげ大会の3つの集会を行っています。

それぞれ、5年生の各学級が中心となって運営を計画します。なかでも、送別音楽会は、1年生から6年生までの各学級がそれぞれ音楽の時間に学習した歌や器楽などを発表します。力一杯、元気な笑顔で歌う低学年、リコーダーや打楽器などいろいろな楽器を使う中学年、迫力のある美しい歌声や演奏を聞かせる高学年など、聞いていて心が温まる音楽会となっています。



附属中学校

1947(昭和22)年4月設置

模擬県議会

中学校時代の学習の集大成として、総合的な学習において、自分たちの住む徳島の課題を考え、疑似的な政党をつくり、各委員会においてその解決策を討論する場を設ける「模擬県議会」を行い、今まで培った問題解決能力を十分に発揮して、郷土愛を育む取組を続けています。

この取組は、総合的な学習の導入以前の1998年から、教科横断型の問題解決型学習として始まり、進化発展しながら現在に至ります。

各教科の見方・考え方を働かせて、徳島の課題を中学生の目線でしっかりと考え、それらの解決策を議論しています。議案書の作成ひとつ取っても、その政策を実現するために物事を多面的・多角的に捉える必要があります。この実践を通して、子供たちの「深い学び」の醸成が確実に見られています。



附属特別支援学校

1960年4月 附属小に特殊学級設置
1962年4月 附属中に特殊学級設置
1966(昭和41)年4月設置

就業体験

高等部では、卒業後の進路を見据えて、毎年6月と9月に2週間の「就業体験」を実施しています。生徒の特性に応じた事業所等へ出向き、終日その事業所で働いたり、生活したりします。特に、高等部3年生にとっては、卒業後の進路に直結する大切な実習となります。

実習前には、事業所等への挨拶や打ち合わせ、スキンケア教室や実習服登校での身だしなみ確認、そして、実習の心構えなどをしっかり学んでから「就業体験」に臨みます。実習先では、学校生活とは違う適度な緊張感があり、子どもたちの働く意欲や態度にも良い影響を与えるようで、社会の中で「働く」体験の大切さを感じる取組です。

本校の子どもたちは、このような貴重な社会体験を事後に授業で振り返りながら、社会に出る準備を進めていきます。

